

平成 27 年度 研究成果報告書  
Research Achievement Report FY2015

Date: 2016 年 3 月 4 日

言語社会専攻長

日本語・日本文化専攻長 殿

To Dean of Studies in Language and Society

To Dean of Studies in Japanese Language and Culture

講座名・職名 Course Title・Job Title	アジア II 講座・准教授
氏名 Name	加藤昌彦
専門分野 Academic Field	言語学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	ポー・カレン語及びビルマ語の記述研究
<p>今年度は次のような研究を行った。</p> <p>(1) ポー・カレン語については、「物」を表す名詞が主語位置に現れて動作主非焦点化を行う現象について研究を進めた。主語位置に現れる「物」を表す名詞は、</p> <p>具体的な物を表す用法 &gt; 自然現象を表す用法 &gt; 生理現象を表す用法 &gt; 動作主非焦点化</p> <p>の順で発展していったと考えられる。ポー・カレン語およびスゴー・カレン語にはこの現象が存在するが、同じカレン系言語であるカヤー語やカヤン語には「具体的な物を表す用法」はあるものの、「自然現象を表す用法」以降の用法が存在しないことも分かった。このことは、ポー・カレンとスゴー・カレン語が系統的に近いことの反映である可能性があって興味深い。</p> <p>(2) ビルマ語については、一般向け語学入門書『ニューエクスプレス ビルマ語』（白水社刊）を上梓した。これは『エクスプレス ビルマ語』（1998 年刊）の全面改訂版である。</p> <p>今回の改訂にあたり、発音表記を、ビルマ語の音素体系をより正しく反映するものに改めた。今後ビルマ語の発音表記を学術図書や論文等で用いる者にとっての一つの基準となることを目指した。声調表記において、低く発音される促音節を明確に表記することにしたことは、世界のビルマ語研究における初めての試みである。</p> <p>文法の説明に関しても、旧版よりも言語学的に正確なものに改めた。最近の自分自身のビルマ語研究の成果も盛り込んである。文法項目も、再帰表現、推量表現を始めとして、重要と思える項目を増やした。なお、前版において述べた「授受動詞の使役動詞化」は、ビルマ語研究界における最初の指摘である。</p>	